

援助者との関係性が 被援助者の返報行動に及ぼす影響

松 浦 均¹⁾

問 題

援助行動において、援助者と被援助者の相互関係は、その場においては、援助者から被援助者への一方的な資源の提供ということがいえる。しかし、通常被援助者が、その後、その援助に対する何かしらの返報行動をとることにおいて、当該関係は両方向的な相互行動をもつものとなる。

このような返報行動は、日常極めて頻繁に見られるものである。個人は援助を受けた場合、助けてもらったわけであるから、気分的には快であることが予想されるが、同時に援助を受けたことにより、申し訳ないとか、悪いといった否定的な感情をもつ場合がある。この否定的な感情を心理的負債感、あるいは恩義とよび (Greenberg & Westcott, 1983)、被援助者は、その否定的な気分を解消するために援助者に返報をするというものである。このメカニズムについては衡平理論や互惠規範で説明されている。

衡平理論の立場からの説明 (Walster, Walster, & Berscheid, 1978) は、援助者は援助のために自分の持てる資源からの出費を負い、一方、被援助者は援助を通して利益を得る。したがって被援助者の交換率は援助者のそれを上回り、両者の関係は衡平ではなくなる。被援助者はこれにより不快な緊張を経験し、これを解消を目指すというものである。互惠規範からの説明 (Greenberg & Frisch, 1972) は、他者から援助されたことが一種の負債を背負った状態を生みだし、それが不快感の源泉となり、さらに、負債感とは他者に返礼するよう義務づけられた心理的状态を意味し、負債の程度が大きいほど返報行動を喚起するというものである。つまり大きな援助を受けるほど強い負債感を経験し、返礼するよう動機づけられるとしている。両方の説明とも、援助出費と被援助者が受けた援助成果 (利益) を被援助者

の不快感を規定する要因としてあげている点で共通している。

ところで、この返報行動に関する研究は本邦でははわずかであるが、それらにおいて、心理的負債感とは従属変数として取り上げられてきた。相川 (1988) は、どのような過程で心理的負債感が生じるかということに焦点を当て、同じ援助を受けても、相手が違ったり、状況が違ったりと感じる負債感も異なることを報告している。また、西川 (1986) は負債感とは他者に返礼するよう義務づけられた心理的状态を意味すると述べ、負債感と返報義務感 (返礼義務感) は因果的に変動することを示している。これらの考えからすると、援助を受けて負債感や返報義務感を感じた時に、その後、実際にどのような返報行動をとるのか、返報義務感はどのような形で処理されるのか、それが関係の不衡平状態解消とどのように関連しているのかなどについても、状況により異なることが予想され、表に現れる行動は多種多様であることが推測できる。

ここで、西川 (1986) は心理的負債感と返報義務感をほぼ同義語として扱っているが、筆者は両者は少々意味が異なるものと考え、返報義務感とは返報行動を行えばある程度払拭できるが、受けた援助があまりにも大きなものであったりすると (例えば、人命救助など)、いくら返報行動をしても心理的負債感は拭えないことがある。逆に、それほど大きな援助ではないのに、相手に対して「義理がある」などという場合は、相手の援助に対しては心理的負債感とはそれほど感じないが、返報義務感はかなり高いということがないだろうか。つまり、心理的負債感と返報義務感とは因果的に連動しないことが有り得ると考えられる。さらに、返報行動はこれらの変数と確かに因果的な関係にあるが、負債感と返報義務感はそれぞれ独立に実際の返報行動に影響している可能性があると考え、

さて、返報行動についてももう少し考えてみよう。援助を受けた後の心理的負債感を解消するべく日常の返報行

1) 名古屋大学大学院研究生

動を考えた場合、例えば、日頃より親しく行動をともにしている間柄では、些細な援助行動であれば、わざわざ返報行動をとることはなく、互恵的にいずれ自分が相手を援助する機会がおとずれるときまでそのまましておくということとはよくあることである。一方「親しき仲にも礼儀有り」というように、援助行動によってはきちっと返報しておかなければ、関係が悪化していくことを気にしなければいけないこともある。さらに、これが初対面の人や知っている気のおけない関係でなければ「義理」なども働いて、返報行動をとらなければ、自分の印象を悪くさせ、負債感を拭うこともできないばかりか、負債感がさらに増すだけということも考えられる。近所づきあいなどにも、そうした要素が大きく働いていると考えられる。つまり、多くの場合、どのような返報行動をとるかということを考えるとき、まず考慮されることは相手との間柄といったような関係性である。

この点について、松浦（1988）は、衡平性の研究のなかで、関係性の異なる相手からの同じ日常的な働きかけに対して、こちらがとる次の行動のあり方として3種類の行動パターンを呈示し、どのような形でそれに応えるかをたずねた。相手としては、普段から親しくしている友人と関係が崩壊・解消して友人関係にない相手を想定させた。また、この場合の3種類とは、①同様の行動、②お互い様であり特に行動をしない、③儀礼的な返報行動をとるの3つであった。その結果、次の機会に同様の行動をして応じるという回答がほとんどをしめ、相手の関係性の違いによる影響はほとんど出なかった。これは、調査票の内容として相互行動の衡平さを測定するということがあからさまであったために、衡平性回復の手段として、①の同様の行動をとるという回答に偏った可能性があることと、2種類の相手は一方が友人関係を解消したからといってももともとは同じ世代の友人であったために行動としては、それほど差が出てこなかったものと考えられる。いずれにせよ、この研究では、援助行動を受けた場合を想定しているわけではなく、心理的負債感や返報義務感が起こったかどうかは不明である。当然、返報行動の関連までは追求できておらず、返報行動がどのような心理的過程をたどって生じてくるのかという視点には立っていない。

返報行動は、相手との関係性の要因の他に、援助行動そのものの要因によっても異なることが考えられる。いわゆる「お返し」というのをどのような形で行うかというのは、地域社会や文化的な背景も関係してきて、社会通念上の形式的な規範に従うなど、ある特定の行動においてはどのような方法でお返しをするか決まっていることもある。返報行動をとるかどうかの被援助者の判断は、

相手がどういう人物かということの他にどんな援助を受けたかということにも依存する。

援助行動は、様々な観点からいくつかの種類に分類されているが、相川（1985）は、被援助者事態を恩義（心理的負債感）の強さの観点から8種類に分類している。この分類がそのまま返報行動の方略を規定するかどうかもまでは検討されておらず、本研究ではこの分類に基づいて被援助事態を想定し、被援助者が各種援助事態において受けた心理的負債感と返報行動の方略との関係について明らかにしていく。

本研究の目的は、援助行動を受けてから返報行動が生起するまでの心理的過程を明らかにするために、援助者との関係性を独立変数として、実際にどのような返報行動を行うのかということ調べることである。具体的には、援助者との関係に応じて心理的負債感はどのように異なるのか、負債感を感じた後の行動がどのように異なるのかということに焦点を当てて検討していく。

方 法

1. 被調査者

N 短期大学の1・2年の学生51名。全員女子である。

2. 調査年月と実施状況

1992年6月。心理学の授業の中で質問紙に一齐に回答してもらった。所用時間は約1時間であった。

3. 調査の内容

相川（1985）による40種類の被援助事態を参考にして25種類の被援助事態を設定し、それぞれについて、A. 親しい友だちから、B. 初対面の人から、C. 知り合いの人からの3種類の人物から援助を受けた場合を想定して回答してもらった。調査の内容は以下の通りである。

①心理的負債を感じる程度。調査票には、心理的負債感という語よりも一般的に通用する「恩義」という言葉を使用し、25項目それぞれについて恩義を「全く感じない」から「非常に感じる」までの4段階で回答を得た。

②具体的な返報行動。実際にとると思われるお礼としての行動を25項目それぞれについてすべて自由記述で具体的に回答してもらった。後でこちらで5種類のカテゴリーに分類した。

③返報率。実際にとると思われるお礼としての行動は、感じた恩義に対してどの程度の割合で行うか、25項目それぞれについて百分率で自由に申告してもらった。

④返報行動にいたるまでの時間。お礼としての行動を援助を受けた後、どのくらいの時間をおいて行うか、とくに単位を設定せず、直後から数週間、数年後、特定の日

時など自由に答えてもらった。後でこちらで4種類のカテゴリーに分類した。

結果と考察

1. 相手との関係性による心理的負債感の違い

まず、25種類の被援助事態から受ける心理的負債感が相手との関係性においてどのように異なるのかという問題について、3種類の相手ごとにそれぞれ因子分析を行った。その目的は、被援助事態が相手によってどのように体系づけられて見られるのかを明らかにすることである。

Table 1 には、親密な友人からの援助の場合、Table 2 には初対面の人からの援助の場合、Table 3 には知人からの援助の場合をそれぞれ示してある。3つの因子分析結果は、それぞれ固有値の状況から6因子ずつ抽出し、バリマックス回転後の因子負荷量を示した。結果はそれぞれ大きく異なり、各因子を構成する被援助事態の項目は異なっている。このことは援助者との関係性によって被援助事態に対する見方が異なるということを示唆するものである。相川(1985)は、援助者との関係性を特に考慮せずに被援助事態を分類しているが、この結果から、被援助事態を援助者との関係性に応じて別々に

Table 1 親密友人に対する心理的負債感における因子分析結果(バリマックス回転後の負荷量)

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	Factor6	共通性
22 面倒な仕事を代わりにやってもらった	.732	.210	-.026	.121	-.055	-.270	0.672
3 気分が悪くなったとき介抱してもらった	.719	-.183	.051	.213	.164	.278	0.703
6 探し物を一緒に探してもらった	.713	.165	.229	.073	.033	.154	0.618
14 荷物を持ってもらった	.656	.152	.443	.019	.096	.084	0.666
9 車で送迎してもらった	.451	.400	.352	.174	.025	.095	0.528
18 仕事で遅くなったとき泊めてもらった	.075	.785	.348	-.118	.052	-.031	0.761
11 お金を貸してもらった	-.143	.778	-.076	.221	-.030	.307	0.777
12 車が故障したとき助けてもらった	.314	.573	-.065	.387	.181	.123	0.628
1 分からない事や知らない事をおしえてもらった	.187	.568	.343	.334	.113	.005	0.600
13 友人を紹介してもらった	.326	.539	.211	-.204	.232	.002	0.536
23 急用の際、車を貸してもらった	.371	.442	.279	.239	-.322	-.145	0.592
17 病気や怪我の時にお見舞いに来てもらった	-.005	.011	.814	.285	.237	-.070	0.805
15 遊びに連れて行ってもらった	.108	.317	.576	.082	-.210	.363	0.627
25 親切な助言を受けた	.265	.235	.575	.013	.310	-.465	0.769
10 席を譲ってもらった	.336	.095	.573	.180	-.194	.230	0.573
16 道が分からなくなったときおしえてもらった	.331	.460	.473	.364	-.080	-.133	0.702
8 食事等をおごってもらった	.126	.314	.423	.149	.086	.201	0.363
2 大きな仕事を手伝ってもらった	.095	.205	.189	.688	.205	.184	0.636
20 酔っぱらいに絡まれているところを助けてもらった	.069	.059	.289	.681	.164	-.094	0.591
21 怪我をしたとき病院に連れて行ってもらった	.377	.000	.283	.588	-.279	.033	0.756
24 ボランティア活動を受けた	.282	-.008	-.058	.405	-.425	-.420	0.604
5 人の非難からかばってもらった	.270	-.138	.106	.215	.756	.008	0.721
7 仕事やアルバイトを紹介してもらった	-.100	.318	.057	.053	.606	-.110	0.500
4 悩みごとを聞いてもらった	.406	.281	-.122	.370	.484	-.180	0.663
19 輸血をしてもらった	.208	.200	.120	.096	-.069	.705	0.608
因子寄与	7.51	2.10	2.06	1.50	1.46	1.35	

援助者との関係性が被援助者の返報行動に及ぼす影響

Table 2 初対面の人に対する心理的負債感における因子分析結果（バリマックス回転後の負荷量）

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	Factor6	共通性
21 怪我をしたとき病院に連れて行ってもらった	.786	.035	-.009	-.040	.015	.074	0.634
16 道が分からなくなったときおしえてもらった	.778	.091	-.075	.124	-.003	-.033	0.635
20 酔っぱらいに絡まれているところを助けてもらった	.729	-.046	-.119	-.055	.121	.147	0.587
10 席を譲ってもらった	.607	.106	.302	-.179	.225	-.017	0.554
4 悩みごとを聞いてもらった	.590	-.287	.548	.146	.518	.066	0.761
25 親切な助言を受けた	.385	.150	-.242	.242	.329	.144	0.417
22 面倒な仕事を代わりにやってもらった	.086	.839	-.134	.019	-.022	-.029	0.731
23 急用の際、車を貸してもらった	.273	.674	.281	-.181	-.022	-.149	0.712
15 遊びに連れて行ってもらった	-.086	.663	.467	.440	.058	-.100	0.871
8 食事等をおごってもらった	-.090	.550	.346	.404	-.224	.184	0.678
3 気分が悪くなったとき介抱してもらった	.232	.461	-.027	-.004	.436	.246	0.517
19 輸血をしてもらった	-.188	.455	.159	.369	.091	.224	0.463
11 お金を貸してもらった	-.104	.133	.779	.034	.024	.145	0.658
9 車で送迎してもらった	-.182	.232	.642	.223	.405	-.060	0.716
17 病気や怪我のときにお見舞いに来てもらった	-.122	.361	.483	.276	.253	-.314	0.617
7 仕事やアルバイトを紹介してもらった	-.204	.065	.066	.827	.152	.132	0.775
5 人の非難からかばってもらった	.176	-.003	.090	.591	.519	-.070	0.662
13 友人を紹介してもらった	.332	.253	-.280	.579	-.151	-.254	0.675
18 仕事で遅くなったとき泊めてもらった	.131	-.071	.460	.629	-.200	-.059	0.672
6 探し物を一緒に探してもらった	.080	.063	.002	-.002	.814	.205	0.716
14 荷物を持ってもらった	.068	.003	.175	.002	.751	-.008	0.600
1 分からない事や知らない事をおしえてもらった	.236	-.101	.053	.176	.257	.598	0.537
2 大きな仕事を手伝ってもらった	.044	.326	-.037	-.038	.101	.610	0.493
12 車が故障したとき助けてもらった	.219	-.080	.468	-.162	.136	.532	0.601
24 ボランティア活動を受けた	.393	.218	.005	.005	.205	-.489	0.482
因子寄与	4.84	3.50	2.24	1.99	1.71	1.47	

考えていく必要があることが明らかになった。とくに援助者が親しい人か初対面の人かという違いは大きく、負債感の感じ方が異なっている。しかし、それぞれ因子の内容を概観すると相川の分類のようにまとまった意味をなしてはならず、どのように解釈できるのか不明確である。ケース数が全体に少なく信頼性が低いことにも帰因するところで、今回無理に解釈をすると恣意的な解釈になる可能性もあり、因子構造に違いがあるということの提示にとどめておくことにする。これは大きな問題点であるが、3者に対する恩義の感じ方の微妙な違いが出ているといえる。それぞれの背景にあるものが今回の調査

では把握できなかった。今後は、どこでどのように恩義や負債感の感じ方が異なってくるのかを明らかにするような方法を工夫してさらに検討をすすめていきたい。

2. 心理的負債感と返報率の関係

25種類の被援助事態に対して個人がどの程度心理的負債感を感じているか、また相手からの援助に対してどの程度返報するかについて Table 4 に同時に示した。

これによると、同じ援助行動でも援助者の違いによって、その後を受ける負債感に違いがあるものが多いことがわかる。場合によっては負債感を感じない被援助

Table 3 知人に対する心理的負債感における因子分析結果 (バリマックス回転後の負荷量)

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	Factor6	共通性
11 お金を貸してもらった	.804	-.011	.324	.101	.070	-.205	0.808
19 輸血をしてもらった	.734	.019	.050	.225	.234	.273	0.721
8 食事等をおごってもらった	.719	.181	.145	.245	-.022	.101	0.641
17 病気や怪我のときにお見舞いに来てもらった	.430	.057	-.078	.322	-.135	.044	0.318
21 怪我をしたとき病院に連れて行ってもらった	.140	.793	.157	.002	.309	-.207	0.811
20 酔っぱらいに絡まれているところを助けてもらった	.052	.756	.261	.148	-.031	.093	0.674
16 道が分からなくなったときおしえてもらった	-.196	.690	.169	.359	.321	-.096	0.784
10 席を譲ってもらった	.315	.676	-.041	-.240	-.074	.282	0.700
25 親切な助言を受けた	-.084	.586	-.181	.236	.133	.390	0.609
9 車で送迎してもらった	.189	.114	.700	.276	-.191	.368	0.787
6 探し物を一緒に探してもらった	-.171	-.011	.639	-.007	.138	.554	0.764
18 仕事で遅くなったとき泊めてもらった	.238	-.265	.626	.432	.184	-.094	0.748
12 車が故障したとき助けてもらった	.265	.373	.623	.197	-.088	.081	0.651
3 気分が悪くなったとき介抱してもらった	.090	.114	.540	-.102	.180	.025	0.356
23 急用の際、車を貸してもらった	-.121	.173	.530	-.319	.429	-.127	0.627
5 人の非難からかばってもらった	.177	.053	.286	.762	.028	-.092	0.705
7 仕事やアルバイトを紹介してもらった	.407	-.037	-.024	.622	.049	.293	0.642
13 友人を紹介してもらった	.036	.266	.029	.602	.338	.023	0.550
4 悩みごとを聞いてもらった	.195	.085	-.080	.511	-.155	-.073	0.342
15 遊びに連れて行ってもらった	.365	-.087	.084	.156	.820	-.001	0.845
22 面倒な仕事を代わりにやってもらった	.145	.164	.356	-.078	.740	.198	0.767
24 ボランティア活動を受けた	-.207	.274	-.134	-.021	.590	.153	0.509
14 荷物を持ってもらった	-.303	.236	.203	.273	.358	.231	0.445
1 分からない事や知らない事をおしえてもらった	-.028	.121	.127	-.053	.086	.842	0.751
2 大きな仕事を手伝ってもらった	.501	-.007	.138	-.006	.341	.551	0.689
因子寄与	5.77	3.14	2.24	1.79	1.72	1.58	

事態もいくつかあった。全体的な傾向としては、相川(1988)の結果とは逆に、初対面の人に対して最も負債感を感じていた。しかし同時に、誰に対して最も負債感を感じているかは援助事態によって異なっていることも指摘できる。負債感の感じ方としては、援助者との関係性において必ずしも一貫した傾向があるわけではないことが示唆される。

一方、返報率の方は、援助者による違いは3者間でそれほどなく、3者様に同程度のもが多かった。返報率は総じて100%に近い値を示している。しかし、3者間で有意差があったものも、親密友人と初対面の人でど

ちらがどうという一貫した傾向は見られず、負債感の感じ方と食い違いのあるものさえある。全体的に見ても、負債感とは異なり、返報率は親密友人に対する場合が最も高くなっている。

これらの結果からいえることは、心理的負債感と返報行動における返報率は極めて独立した次元のものである可能性が示唆された点である。心理的負債感と返報率は、確かに負債感が強いほど返報率も高くなる傾向があるが(両者の相関は、 $r_a=0.366$, $r_b=0.512$, $r_c=0.428$ いずれも有意である)、それぞれの程度は相手との関係性において一貫しておらず、どの程度返報するかという

援助者との関係性が被援助者の返報行動に及ぼす影響

Table 4 援助者の違いにおける被援助者の心理的負債感と返報率 (n=49~51)

被援助事態	心理的負債感 ^{a)}				返報率 ^{a)}			
	親密友人	初対面	知人	有意差	親密友人	初対面	知人	有意差
1 分からない事や知らない事をおしえてもらった	2.58	3.12	2.75	***	79.1	77.6	78.5	
2 大きな仕事を手伝ってもらった	3.41	3.41	3.43	***	97.3	88.8	86.5	
3 気分が悪くなったとき介抱してもらった	3.37	3.73	3.37	***	94.7	88.0	89.9	
4 悩みごとを聞いてもらった	3.20	2.49	2.80	***	86.8	65.9	73.7	***
5 人の非難からかばってもらった	3.55	3.33	3.30	**	90.0	81.4	81.6	**
6 捜し物を一緒に探してもらった	3.08	3.61	3.27	***	86.4	85.4	81.8	
7 仕事やアルバイトを紹介してもらった	2.59	2.73	2.78	*	77.6	76.0	76.8	
8 食事等をおごってもらった	3.06	3.18	3.12		95.8	85.5	87.1	*
9 車で送迎してもらった	2.78	2.98	2.92		79.3	73.0	79.5	
10 席を譲ってもらった	2.70	3.19	2.96	***	81.0	80.4	78.9	
11 お金を貸してもらった	3.10	3.51	3.30	**	88.8	92.6	88.7	
12 車が故障したとき助けてもらった	3.25	3.84	3.52	***	92.5	94.1	89.4	*
13 友人を紹介してもらった	2.22	1.90	1.98	*	54.0	46.9	50.7	
14 荷物を持ってもらった	2.69	3.37	3.04	***	78.9	79.9	80.4	
15 遊びに連れて行ってもらった	2.64	2.82	2.88		84.1	81.9	86.7	
16 道が分からなくなったときおしえてもらった	2.61	3.08	2.89	***	77.0	80.6	77.9	
17 病気や怪我の時にお見舞いに来てもらった	3.62	2.74	3.40	***	97.6	80.6	92.1	***
18 仕事で遅くなったとき泊めてもらった	3.18	2.96	3.33	*	89.3	77.9	88.1	**
19 輸血をしてもらった	3.75	3.80	3.73		95.7	102.3	99.6	
20 酔っぱらいに絡まれているところを助けてもらった	3.48	3.82	3.57	**	90.0	93.8	90.4	**
21 怪我をしたとき病院に連れて行ってもらった	3.62	3.90	3.65	**	96.8	101.6	101.6	
22 面倒な仕事を代わりにやってもらった	3.26	3.39	3.29		92.0	91.3	89.6	
23 急用の際、車を貸してもらった	3.08	3.55	3.33	***	87.4	93.1	90.6	**
24 ボランティア活動を受けた	3.18	3.27	3.28		83.5	85.2	86.2	
25 親切な助言を受けた	3.28	3.02	3.04	*	81.7	82.8	84.2	
全体平均 ^{b)}	3.09	3.24	3.16	***	86.3	83.3	84.5	***

a) 負債感とは4段階尺度における得点、返報率は相手からの援助を100としたときの返報率(%)。

b) 全体平均のケース数は1229~1264。

ことが負債感の大きさによって一義的には決まらないということがいえよう。

次に、従来いわれてきた返報義務感とは、義務を感じるかどうかという次元において心理的負債感とほぼ同義語であったが、その場合に暗黙に仮定していたのは、恩義に対して100%の返報ではなかったか。100%の返報により心理的負債感の払拭が達成されるというのが、衡平理論における前提であるように思われる。しかし、本研究の結果から見ると、100%の返報をしないケースもかなり存在することが明らかになった。返報義務感というのが、何%の返報で払拭されるのかということは言及で

きないが、もとより返報率の申告は個人の主観的な判断にもとづいてなされたものであり、このくらいの返報でよしとするという意識の上での数字であることから、100%でなくても返報義務感が払拭されている個人が存在することを示唆している。

この点について衡平性の観点から考えると、負債感を100%払拭できた時点で「衡平」が回復されるのであるが、全体的にみれば、100%返報のケースがかなり多くを占め、具体的な行動はともかくとして、心理的に衡平な関係を目指している場合が多く存在していることが明らかになった。この結果は相川(1984)に沿うものであ

る。しかし、返報率が100%に満たない場合は、少なくとも受けた恩義に対してある程度の負債を残したままにしているということがいえ、この場合は両者の関係が不均衡なままの状態であるといえる。援助行動の場合には、被援助者が負債感を100%解消して、完全な衡平な関係を維持する気持ちがはたしてあるのかどうかという問題もある。逆に、返報率が平均して100%を越える援助事態もあり（初対面の人からの輸血、初対面・知人に怪我をして病院につれていってもらった）、この返報率に現れる心理は、100%返報したからといって決して衡平な関係には至らないというものであると推測できる。緊急性が高く、援助により受けた利益は何物にも比べられない自分の生命であり、このようなケースはいくら返報しても心理的負債感を払拭することはできないケースといえる。衡平理論にもとづく説明が不可能な事例である。

心理的負債感と返報率の間に微妙な食い違いがあることから、援助行動を受けた後の関係をどのように持って

いくかは、ある程度今後の相互行動を予測しながら決定され、具体的な返報行動やその他の行動の方略もそれにもとづいてかなり複雑な過程を経ているようである。援助を受けた直後の不衡平な状態を衡平な状態にもどすために、必ずしも返報行動のみによって「衡平」な関係を目指しているのかどうかという問題も出てきた。

3. 返報行動の方略

返報率で見れば、全体的にかなりの高率で返報するとしており、具体的にどのような形で返報行動をとるのかということについてたずねた。結果を Table 5 に示した。これは、相手からの援助に対して実際にどのような返報行動をとるのか、さらにその行動は援助を受けてからどの程度時間を経てから行うのかについて示したものである。

まず、返報行動の方略として、自由記述されたものを以下の5種類にカテゴリー分けを行った。①返報行動なし、②返報行動以外の行動、③無形の返報行動、④物質

Table 5 返報行動と返報行動に至るまでの時間の関係

返報行動	返報行動に至るまでの時間				Total
	0	直後	日時確定	日時未確定	
対：親密友人					
返報行動なし	35	1	2	2	40
返報行動以外の行動	1	17	4	4	26
無形の返報行動	0	593	39	24	656
物質交換による返報行動	0	121	136	44	301
同一行動による返報行動	0	36	28	183	247
Total	36	768	209	257	1270
対：初対面					
返報行動なし	54	7	2	2	65
返報行動以外の行動	2	7	1	5	15
無形の返報行動	0	813	39	24	874
物質交換による返報行動	0	104	142	29	275
同一行動による返報行動	1	5	3	32	41
Total	57	936	187	90	1270
対：知人					
返報行動なし	37	3	1	1	42
返報行動以外の行動	2	6	1	4	13
無形の返報行動	0	761	47	25	833
物質交換による返報行動	0	103	174	30	307
同一行動による返報行動	0	7	10	58	75
Total	39	880	233	118	1270

交換による返報行動、⑤同一行動による返報行動である。返報行動に至るまでの時間については以下の4種類にカテゴリー分けをした。①時間についての判断なし、②援助事態の直後、③返報の予定があり、ある程度日時が確定している、④返報予定があるが、日時は未確定のもの4つである。表中の返報行動なしで時間が0ではないものは、その時点までは行動方略が未定というケースである。

結果を見ていくと、被援助事態によって差があるが、全体的な傾向としては、直後に「無形の返報行動」を行うものが最も多い。つまり援助を受けた後、口頭で礼を述べるだけというものである。このケースでは礼の述べ方としては「礼を言うだけ」から「繰り返し丁寧に礼を述べる」といったものまでその程度はいろいろあったが、いずれもこれで100%返報したとしているものがかなり存在している。これは、完全に認知的な操作に依存しており、平衡性の回復を目指す手段としては、物質的交換に依存しない心理的資源の投入だけである。援助事態によっては援助者側も礼さえ述べてくれればそれでよしとする場合も十分有り得るのでこのようなケースが多いことも理解できる。平衡関係の維持に心理的な交換が大きな役割を果たしている事例の1つである。

「物質交換による返報行動」は、援助を受けた後、品物に託して礼をするというもので、「直後」か、「2、3日後」、「1週間後」までにというように確実に近い内に返報する用意があるものが大半である。この場合、返報率は必ずしも100%ではなく、品物にする際に何%か割り引かれているケースが多く存在した。受けた心理的負債感客観的に数値化することは難しい。しかし品物となると誰にでも極めて客観的にその価値が判断できるために、被援助者の主観的な心理的負債感の強さと客観的な品物の値段的価値が合致せず、あるいは援助者が品物をどの程度に判断するのか不明な分だけ、返報率としては割り引かれてしまうのではないかと考える。もっとも被援助者は品物に心理的な付加価値を含めている可能性もあり、心理的には、品物に対して「品物を渡すこと」が補償的に働いて、返報率が高い率まで引き上げられているものと思われる。

「同一行動による返報行動」は、相手から受けた援助と同種の援助を自分がして返すというものである。親密友人への返報は同一行動によるものが多く、それは「いずれ」「そういう機会がおとずれれば」といった返報日時が未確定のものが多く。すなわちそういった行動が日頃より相互に交換されており、改めて何かお礼をするものではないという意識が見える。この場合は同一行動で返すということからか、返報率は100%のケースが多く

存在した。同一行動による返報は、初対面や知人に対してはあまり行われませんが、そのような機会が予測できないためと考えられる。このような行動を支配するものは、いわゆる互惠規範であると考えられる。親しい友人同士であれば、すでに互惠的な関係を経験している可能性が高く、心理的負債感も初対面の人と比較して小さいものである。しかし、確実に今後の相互行動が期待できるために返報行動としては、同一行動をとるケースが他と比べて多い。

返報行動を起こすまでの時間を全体的に見てみると、初対面の人ほど直後に偏っていることがわかる。当然、今後相互行動が期待できないことによるものであるが、行動を起こすまでの時間も返報行動において重要な要素であることが示唆された。

反省と今後の課題

援助行動の研究は、援助の生起する要因などの研究が中心であり、援助者側の視点に立ったものが多く、被援助者側からの視点に立つものは少なかった。本研究は、被援助者側に焦点を当てて、援助を受けた後の心理的過程と実際の行動を明らかにするものであった。しかし、結果的にその詳細までを記述するに至らず、反省すべき点が多々でてきたのでまとめとして整理しておく。

援助者と被援助者の相互行動ということで、被援助者の返報行動を中心に見てきたが、援助者の心理と被援助者の心理の適合が見られていない。まず、援助を受けた場合にそれをどのように感じるかということには今回触れておらず、西川(1986)の指摘するところの、援助を受けた場合に被援助者がうれしくも感じ同時に憂鬱にも感じるものが、今回の調査では明らかにされなかった。相手との関係性によって同じ援助行動を受けても感じ方が変わることは大いに考えられ、そこから次の行動、おそらくは返報行動が規定されていくことを考慮すれば、被援助者の感情の状態を把握しておく必要があったと思われる。すなわち返報行動がどのような動機づけで行われるか(好意を持っている相手に対して積極的に行動するか、負債をぬぐい去るがためだけに行うのかなど)、あるいはその意図はどういうものかなどが明確にされなかったために、行動の背後にある心理的な動きが掴みきれなかった。

次に、ここで想定した25の被援助事態に対して、回答は実際の行動ではなく、想定された返報行動である。そのために実際に負債感が払拭され、平衡が回復したかどうかを確認できていない。また被調査者が負債感払拭、不均衡低減を目指してそれらの返報行動をとろうとしていたのかが不明である。これらの点については、実験的

に確認するような方法を工夫すべきであり、調査的な手法では解明は困難である。

最後に、本研究では問題の設定として衡平理論や互惠規範からの考え方に立ってきたが、今回の被調査者の回答には、それだけでは説明できない部分が多分に含まれている。返報行動を規定する要因は他にも内在化しており、援助者との関係性によって同じ返報行動でもそれらの意味づけ自体が変わることがある。返報行動の意図性を考えるとき、援助行動の意図性と同様、いろいろなことが考えられる。相手との今後の相互行動に何を期待するかによるところは大きく、単に被援助事態の否定的な感情の払拭のためだけとは考えにくい。それらの他の要素が具体的な返報行動の中にどのような形で入り込んでいるのかということについても検討する必要がある。

引用文献

- 相川 充 1984 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果 心理学研究, 55, 8-14.
- 相川 充 1985 援助に対する被援助者の反応に関する研究(1) 一恩義の大きさによる被援助事態の分類—日本心理学会第49回大会発表論文集, 737.
- 相川 充 1988 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, 58, 366-372.
- Greenberg, M. S., & Frisch, D. H. 1972 Effects of intentionality on willingness to reciprocate a favor. *Journal of Experimental Social Psychology*, 8, 99-111.
- Greenberg, M. S., & Westcott, D. R. 1983 Indebtedness as a mediator of reactions to aid. In J. D. Fisher, A. Nadler & B. M. DePaulo (Eds.) *New directions in helping. Vol. 1. Recipient reaction and aid*. New York: Academic Press. Pp. 85-112.
- 松浦 均 1989 対人関係の持続・安定性に関する研究—友人関係における衡平理論の検討— 名古屋大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 西川正之 1986 返礼義務感に及ぼす援助意図性, 援助成果, および援助出費の効果 心理学研究, 57, 214-219.
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. 1978 *Equity: Theory and research*. Boston: Allyn & Bacon.

(1992年8月28日 受稿)

ABSTRACT

Influence of the Types of Interpersonal Relationships between
Helpers and Recipients on the Recipients' Reactions.

Hitoshi MATSUURA

The purpose of this study was to investigate how the recipient's reactions varies in terms of the types of interpersonal relationships. A questionnaire survey was conducted for fifty one female junior college students. As an independent variable, the three types of interpersonal relationships between helpers and recipients. The first one was that the helper was intimate friend. The second was the helper was no acquainted person. The third type was an acquaintance. To each twenty five helping behavior, Subjects as the recipients answered the strategy of reciprocating behaviors, measures of indebtedness, ratio of reciprocation, and the time span for reciprocal reactions.

Results indicated the following. The indebtedness varied with the types of interpersonal relationships. the ratio of reciprocation varied too. But these variables had different forms of variation. So the equity hypothesis was not able to explain this result, so that showed the reciprocal reaction was independent of the indebtedness. The strategy of reciprocating behaviors and the time span for reciprocal reactions were categorized five and four types. When the helper was intimate friend same behavior to the helper as recipient's reaction was more selected than when the helper were no acquaintant person and acquaintance. And to the intimate helper, the time span for reciprocal reaction was uncertainty. To the no acquaintant helper, reciprocal reaction certainly did after just helped or in a week. And as the strategy changing reciprocal gifts was more selected.